

第1回

キーワード

- ・二元論      ・一元論      ・古代人の感性      ・羅生門的見方

○日本における哲学上の諸問題

二元論

⇔

一元論

・( 分析的 ) 思考

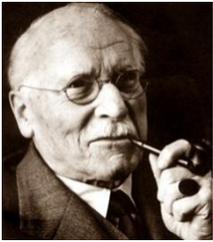
・物事を ( 分割 ) して考える

・( 総合的 ) 思考

・( 主客未分 ) ※主観と客観がはっきりしない

○古代人の思想

・古代人の感性



ユング

(1875~1961)

ユングは古代人について研究した

1930年に東アフリカを訪れて原住民を観察するフィールドワークを行った  
→2つわかった

①古代人は ( 自然に対するおそれ ) をもつ。※ ( 畏怖 )

→自然・謙虚

例：動物の序列 (ゾウ→ライオン→大蛇→ワニ→人間)

②古代人は ( 夢見る人 ) だった。

・夢 ( 抽象 ) と現実 ( 具体 ) がはっきりしていない

→ ( 一元論 ) といえる。

○羅生門的見方

・物事を複数の視点や立場によって真実が異なって見える

古代と現代について

×古代が偽、現代が真

×古代が真、現代が偽

○古代も ( 真 )、現代も ( 真 ) といえる。

第2回

キーワード

- ・ 古代人と神名      ・ 神名＝神      ・ 万葉集の実名忌避

○古事記の神名

- ・ 神名系譜の意味（※古事記では、神名が家系図のように連なって記されていた。）

現代人・・・（ 無味乾燥の名前の羅列 ）

古代人・・・（ 口承社会における美しい語り ）



- ・ カッシーラーの考え方

「神名＝神」 → 「部分＝（ 全体 ）」

今の考え方：名前を呼ぶ＝ただの記号

神話的思考：名前を呼ぶ＝その存在そのものと呼ぶ

例1：「キリストの御名において」→「～の名にかけて」

例2：親鸞の念仏（称名する行為）

カッシーラー

(1874～1945)

南無阿弥陀仏→南無（＝ 帰依する ）、阿弥陀仏（＝ 仏さま ）

○万葉集の実名忌避

- ・ 名前を呼ぶ行為＝（ 相手そのものと呼ぶ ）・（ 相手を支配下における ）

→実名忌避の考え方が出ている。

例1：万葉集 【資料参照1】

例2：平安時代の女性（ 紫式部 ）・（ 清少納言 ）

例3：大工と鬼六

第3回

キーワード

・現代人の解釈 ( 二元論 )      ・古代人の解釈 ( 一元論 )      ・言葉と神名

○神名自体の意味 (3つの分類は「大野 晋」が提唱)

・アメノミナカヌシ系      : 神名が ( 抽象 ) 的

・ウマシアシカビヒコジ      : 神名が ( 具体 ) 的

→ ウマシ    アシカビ    ヒコジ

( 美し )    ( 葦芽 )    ( 彦舅 )

×現代人の解釈

( 生命力 「抽象・原因」 ) → 葦芽「具体・結果」

↑

○古代人の解釈

葦の芽 → ( 神 )

・オモダル系      : 神名が ( 具体 ) 的・言葉が神の名の由来となっている

例:

オモダル      → ( あなたの顔は素晴らしい )

アヤカシコネ → ( ~していただいて恐縮です )

イザナギ      → ( 誘う男 )

イザナミ      → ( 誘う女 )

※すべての言葉が神名になっている

○言霊 (言葉の持つ具体的な力)

古代日本人がいか「      」と信じていたかを示している。

( 山上 憶良 ) の造語

第4回

キーワード

・言霊 ・詩的言語

○言霊

イザナギ・イザナミのように具体的なネーミング

※ ( アミニズム ) : どんなもとにも靈魂 ( アニマ ) があり、それは言葉を理解できる。

例1 : イザナギ・イザナミ神話 ( 大地・島を生命として扱う )

例2 : 大国主神話 ( 国づくりを神の働きとして扱う )

例3 : 海幸彦・山幸彦物語 ( 自然環境や生活の力関係を人のドラマとして扱う )

このような言霊の思想は、細々とではあるが現代まで残っている。

例1 : 竣工式・地鎮祭 → 神主の ( 祝詞 ) が必須

例2 : 婚礼 → 禁句のオンパレード ( 切る = 入刀、終わる = お開きにする )

○詩的言語 ※日本文学の言霊の影響

・和歌の季節感 ( = 推移の感覚 ) ←これが万葉集には多い

石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出ずる春に なりにけるかも

現代人的解釈 : 春の到来 → わらびの芽吹き

( 抽象・原因 ) ( 具体・結果 )

古代人的解釈 : 春の到来 = わらびの芽吹き ( わらびが芽吹いていることが春そのもの )

詩的言語で表すと、「 春が芽吹いている ! 」

第5回

キーワード

・導詞           ・二種の一元論

○日本における言霊思想の影響

①導詞：ある言葉を導くための前置きとなる言葉

例：( 枕詞 )・( 序詞 )・( 季語 )

②文学ジャンルの短章化

長歌 → ( 短歌 ) → ( 俳句 )

○中世人の思想（二種の一元論）

・( 素朴な ) 一元論：現実を無批判に受け入れるだけ

→現実の ( マンネリ ) 化

・( 高度な ) 一元論：現実に批判を加えたうえで受け入れる

→現実が ( 日々新たなもの ) として立ち現れる

第6回

キーワード

・ 禅の修行方法      ・ 本質と文節      ・ 公案の様相      ・ 唐代禅と宋代禅

○禅とは

・ 禅の基本的立場（四聖句）

教外別伝：経典にとらわれない

不立文字：文字や言葉にとらわれない

直指人心：人の心（本来の仏性）を直接指し示す

見性成仏：自分自身に備わる仏性を自覚できれば、仏になれる

・ 禅の修行方法

①（ **只管打座** ）：とにかく座る。（ **呼吸** ）が重要。

② 公案（禅の問答）：（ **現実** ）をよく見るために行う。

→本質にとらわれずに分節する

ポイント

本質：あるものを「 **そのもの** 」にさせているもの。

分節：区切り。その代表が（ **言葉** ）。

公案の様相

師「これは何か？（杖を持って）」

弟「杖である」… ×本質にとらわれている分節

「杖でない」… ×目の前の事実と反する

師「（杖を揺り動かして）見よ、見よ、全世界が揺れている」… ○本質にとらわれていない分節

師「これは何か？（浄瓶を持って）」

弟「木切れとは呼べない」… ×結局、（本質にとらわれている）分節から逃げきれてない

「 **瓶を蹴とばす** 」 … △現実の実在性をはっきり示しているが、分節を使えていない

○宋代禅と唐代禅

・ 宋代禅

弟「禅の核心は何か？」 → 師「庭先のヒノキ」：（ **無分別の悟り** ）の形容

・ 唐代禅

弟「自己とは何か？」 → 師「庭先のヒノキ」：現にヒノキを見ているのは誰だ？

自分を置いて他に問うべき格別の自己はない

第7回

キーワード

- ・三段階の発展
- ・平常心

○禅の理論

- ・三段階による発展



日常生活の中で…

	第一段階	第二段階	第三段階
言葉	本質にとられる分節	無分節	本質にとられない分節
	限定・固定・凝固性		

	①	②	③
勝負	勝ちを意識する →	勝ちを意識しない →	勝ちを意識しない事を意識する(=平常心)→
禅	色(しき)	空(くう)	色(しき)

・① → ②の矢印：( 色即是空 ) 意味：この世のあらゆるモノや現象は、実体がない

・② → ③の矢印：( 空即是色 ) 意味：実体がないから、モノや現象が存在する

⇒禅は( 停滞 )を嫌う

例：百尺の筆頭にさらに一步を進める

○道元について



・古代人の感性を引き継いだ中世人

「文筆詩歌等、詮なきものなれば、捨つべき真理なり」

14才 出家

24才 ( 中国(宋) )に留学

28才 帰国(本来留学は 10年)

道元(1200~1253)

第8回

キーワード

- ・ 言語の独創的使用
- ・ 世界5分前創造仮説
- ・ 親鸞の語

○言語の独創的使用（道元）

『 **正法眼蔵** 』：道元の代表的な著作

古仏曰く 「**有時**高々峯頂立、**有時**深々海底行…」

古仏：( **如浄** ) 禅師→道元の師

ポイント

【有時の解釈】

×ある時は

○実在する時間 ( **幅** のある時間) …過去、未来、すべてを含んだ上で成り立つ

例：松も時なり、竹も時なり→松と竹がそれぞれの時間を生き、時間は経過ではなく、存在の表れ

これらの用法を

「 **言語の独創的使用** 」としている。

○言語の独創的使用（親鸞）

「善人なおもて往生す（を遂ぐ）、いわんや悪人をや」

独創的使用理由：( **真理は自分の言葉で表現してはじめて伝わる** )

※実在する時間について

……………→ 時間（時間幅あり）

・ 道元 : 有時（見解： 過去 現在 未来）

・ 大森荘蔵：過去は ( **現在** ) に依存する。

・ ラッセル：「 **世界5分前創造仮説** 」

→この世界は、五分前にすべてが今の状態で作られたのかもしれない

・ マルクスアウレリウス：一瞬にすぎない現在のみを生きる

哲学 学年末範囲

○道元の修行

只管打座：( とにかく座る )

↓

三昧 : ( 心が集中した ) 状態

↓

身心脱落：( 小我 ) が消失して、( 大我 =世界) にとけこんでいく境地

例「冬草も 見えぬ雪野の 白さぎは 己のすがたに 身を隠しけり

大我：( 雪野 )

小我：( 白さぎ )

※デカルト：( 方法的懐疑 ) によっても、我は存在する

例：我思う、故に我あり

道元 : 小我は消失する

第9回

キーワード

・不染汚（ふぜんな） ・梅花 ・実存

○道元の「現実をよく見る」

身心脱落→不染汚（ふぜんな）：（ 先入観 ）や（ 偏見 ）に染まらない見方

『正法眼蔵』より

例1：雪裏、梅花は一現の量花なり

例2：先師古仏曰く「……、梅開早春」

×梅は早春に開く

○梅は早春を開く

例3：先師古仏曰く「春は梅花に在って画図（がと）に入る」

春をかこうと花を描く

花をかこうと春の花を描く

※松尾芭蕉「静けさや 岩にしみいる 蟬の声」

静かな場면을蟬の声しか聞こえないような書き方をすることで表現

○実存とは？

実存（現実存在）existence

「（ かけがえのない存在 ）として特定の状況の中に存在している自分」

第10回

キーワード

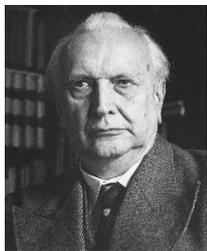
・ヤスパース      ・自由という刑



(1844~1900)

○ニーチェ

- ・( **運命愛** ) : 人生で起こるすべての出来事を「これこそがわが人生に必要だ」と捉え、積極的に肯定し、愛する思想
- ・永劫回帰 : 人生が細部に至るまで全く同じように無限に繰り返すという考え方であり、今この瞬間を肯定的に生きるための思想



(1883~1969)

○ヤスパース

- 「実存は ( **限界状況** ) の中ではじめて自覚させる」
  - 死、苦悩、争い
  - 一寸先は闇



(1889-1976)

○ハイデガー

- ( **頹落** ) …世間の「ひと」に紛れて自分らしさを失って生きる
- ↓
- ( **企投** ) …自分らしく生きる



(1905~1980)

○サルトル

- 「実存は ( **本質** ) に先立つ？」
- 「人間は ( **自由という刑** ) に処されている」
- ( **アンガージュマン** = 社会参加 ) が必要

○実存主義の課題

生が不条理な現実であるにもかかわらず、生を充実させるために積極的に生きること。

第11回

キーワード

・時分の花      ・真の花      ・形木      ・真の自由

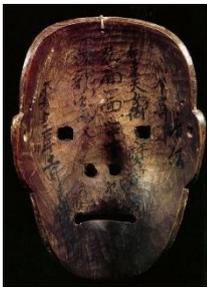
○中世人の思想

すき → すさび → ( さび )

**和歌** 藤原定家 (1162~1241)

「紅旗征戒は吾が事にあらず」

→ (            ) → ( 芸術 )



○世阿弥

- ・( 能楽 ) の大成者
- ・足利義満に見いだされる
- ・世阿弥の能楽をひろめた目的
- ×時間つぶしのためのもの

○時間を ( 創造 ) するためのもの = ( 美 ) を創造する

(1363~1443)

○稽古と形木の確立

世阿弥「花伝書」(花 = 美 )

- ・時分の花：若さのみの美
- ・( 真の花 )：50才超えても保持できる美

○形木：( 型 )、( 様式 )、( スタイル )

① → ② → ③      二曲三体

①形木に従わない自己表現

②形木に従って自己を封印(価値転換)する ( 無主風 )

↓

形木に従うことで自己を活かす ( 有主風 )

③形木にとらわれない自己表現 ( 却来 : 一つの境地に到達して、もとの境地へ立ち戻ること)

※型の制約について

例) 和辻哲郎「面とペルソナ」、加地・新井の対談、大鵬

- ・偽の自由：したい放題
- ・真の自由：( 制約 ) の中で、自分らしさを発揮すること